

# コロナ禍における法文学部の 被災記録の収集と保存Ⅺ

— 2023年度学生座談会報告書 —

青木理奈・鈴木 静・福井秀樹  
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子  
池 貞姫・十河宏行・中川未来

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曾有の災厄である。愛媛大学も、急速に進む感染拡大に対応し教育提供体制が激変して、その後、紆余曲折をへて2022年度より対面授業に戻してきた。しかしコロナ禍前とは異なる局面が、さまざまに生じている。

今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになるだろう。なにより、今のコロナ禍において刻一刻と事態が変わっていく中、時系列で保存できるよう、記録はコロナ禍の初期から継続的に収集することが重要であると考えている。

本プロジェクトは、今回の未曾有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。これまで、愛媛大学法文学部の学生を対象とした調査として、2020年度から継続してアンケート実施、学生手記を収集・分析、座談会を開催、することにより、コロナ禍初年度からの学生生活を分析し記録として保存してきた。また、海外大学におけるコロナ対策や学生意識との比較も行ってきた。

今回の調査は、2020年度のコロナ禍初期に入学してきて、2023年度4回生となった学生に4年間を振り返ってもらうことで、コロナ禍の学生生活4年間の実態の解明を試みた。

## 2. 対象と方法

本調査の対象は、法文学部4回生であり、調査日時、出席者は以下の通りである。

### (1) 座談会および参加者の概要

日 時：2024年2月9日(火) 13：30－16：00

開催形態：対面

出席学生：12名（男性8名、女性4名）

ID	性別	コース	昼夜の別
A	女性	法政	昼間主
B	男性	法政	昼間主
C	男性	法政	昼間主
D	男性	法政	夜間主
E	男性	法政	夜間主
F	女性	法政	夜間主
G	男性	人文	昼間主
H	女性	人文	昼間主
I	女性	人文	夜間主
J	男性	人文	夜間主
K	男性	GS	昼間主
L	男性	GS	昼間主

### (2) 座談会の共通テーマ

今回の座談会では、「コロナ禍における大学生生活について」を共通テーマにし、以下の3点につき学生に発言を求めた。①2020年からのコロナ禍を振り返って思うこと【過去について】、②今年一年を通じて大学生生活はどうであったか【現在について】、③今後の大学への提案と、自身のことについて【未来について】 などである。

### (3) 倫理的配慮について

本調査において、対象者には、以下の内容を口頭で伝え、倫理的に配慮した。座談会冒頭において、本調査の趣旨を明確に伝え、論文等で公表すること、録音することを依頼し同意を得ている。本稿での発言は全て匿名とし、公表する発言内容は、事前に学生それぞれに確認している。学生が発言内容について削除を求めた場合には、応

じている。

### 3. 座談会の内容

以下の発言は文脈が変わらない範囲で整えている。なお、冒頭の趣旨説明、教員や学生の自己紹介、重複する発言や感想、最後の教員からの挨拶等は省略している。司会は、法文学部教員が行っている。

#### 一【過去について】2020年からのコロナ禍を振り返ってどのようなことを思うか。

**学生 J (男性・人文・夜間主) :** 4年前に（入学した僕ら）と比べて、今の学生は羨ましいと思った。（今だったら、僕も）もっとイキイキとハツラツとした学生生活を送ることができたかなと思って。でもその分、当たり前の日常の大切さに改めて気付かされた。例えば、コロナ禍で不要な外出を控えることが求められたり、自分の出身地や近隣でクラスターが発生していたりと、他人事とは思えなかった。世界的にも WHO がテドロス事務局長を中心に活動していたと思うが、具体的な策はまだ模索状態で、大学側もどう対応したら良いのかわかっていなかったと思う。（特に）基礎疾患を持つ人が家族にいる場合は、自分の行動が他人の人生を変える可能性もあったため、その分、行動範囲が狭まり、苦しかったと感じる。これからの人生のスパンで見た時に、この数年間の経験は必ず生きてくると思う。必ずしもマイナス面ではなく、この数年間の経験を活かすことができるという自分のメンタリティーや構え方が大事だと考えている。

**学生 E (男性・法政・夜間主) :** 僕は大阪で2年間専門学校に通い、2020年の3回生から（愛媛大学に）編入し、3、4回生と2年間愛媛で過ごしている。コロナ禍の時は大阪にいたが、その時はコロナにかかるのが当たり前みたいな感じだった。学校は毎日あり、周りの大学がオンラインで授業を行う中、対面で授業が行われていた。コロナが流行っていようと満員電車で揺られ学校に行っていた。愛媛県に来て大学に入学した後は、対応が厳しく、2年間経ってもコロナに敏感な状況にギャップを感じた。

**学生 G (男性・人文・昼間主) :** 2020年に大学に入学し、約1年半はほぼ遠隔授業が中心で、通信教育のような感じだったので、物足りなさを感じることもあった。先ほど（今の学生は）羨ましいという声もあったが、1回生らしき学生を見ると、（自分も）もうちょっと時期がずれていたらもっと色々な大学生活を送れたのかなと思うこ

とがある。生活面での影響は、すぐに実家に引き上げて暮らしていたので特に影響はなかったが、外出はあまり良くないという風潮があり、自分の出身地が田舎町で、コロナ感染者の情報がより広まりやすかった。父親が教員であることや、母親が基礎疾患持ちなので自分の行動には気をつけた。

**学生 B (男性・法政・昼間主)：**各地では対面授業が始まったり、関東ではイベントが始まったりしたにも関わらず、愛媛大学はずっと厳戒体制を維持しオンライン授業のみで、課外活動やサークル、部活等の制限も厳しかった。先程、(大学の対応が) 厳しいという感想があったが、僕も同様に厳しいと感じた。課外活動や行事が一括で禁止されるタイミングもあり、もっと(適切な)やり方があったのではないと思う。ありがたかったことは、一応3回生の頃には、ずっと図書館が開いていたことである。

**学生 C (男性・法政・昼間主)：**当時は全て遠隔授業で少し寂しいと感じる面もあったが、自分のペースで生活ができたので、そのあたりはメリットがあったのかなと思う。しかし、人との交流がなくなり、高校時代の友人としか遊ぶことが出来ず、新しい人脈ができなくなったのはもったいないと感じた。僕は部活に入っていて交流はできていたが、制限がかなり厳しく、誰かがコロナにかかったら2週間ぐらい(部活動が) 停止のような状態で、圧迫感があり敏感になって行動していた。バイトに関しても、募集がかなり減っており、やりたいバイトが見つからなかった印象がある。

**学生 L (男性・GS・昼間主)：**授業については、高校時代の正解か不正解かというテスト形式ではなく、レポートが多かった。レポートを提出しても、フィードバックがなく、自分がどう評価されているのかがわからなかった。友人も少なく、相談できる範囲も狭まっている中で、不安を感じることがあった。自分は硬式野球部に入っていたが、2年生の春まではリーグ戦も出場出来ず、1回の練習時間も3時間に制限され、体調チェックシートなども毎日書き、大学と色々やり取りをして行っていた。部活に所属していない人とご飯に行って、SNS に投稿した後にコロナ感染が判明し、部活が一時停止になることがあり、この対応に疑問を抱いたことがあった。

**学生 F (女性・法政・夜間主)：**授業の履修登録についての説明が不十分で、先生にも聞けず、最初の段階から躓いてしまった。履修登録はなんとか終わったが、思っていた内容と異なる授業もかなりあった。ただ、オンライン授業に関しては、録画を見直してわからない部分を勉強し直したりして、授業内容を自分のペースで勉強できる

点が良かった。先生によって話すスピードが異なるので、自分に合ったペースで学べるのはありがたかった。ただ、2回生ぐらいまでオンライン授業が主流で、対面で話さないと友人は作れず、大学に進学した意味があったのかと思うこともあり、大学生（になった）感（じ）はなかった。生活面は、サークルや部活に所属したい気持ちはあったが、サークル紹介もなく、どのサークルに所属したら良いのか分からなかった。サークルには所属せず、その分アルバイトをいっぱいして人間関係を広げることにした。10種類ぐらいのアルバイトを通じて人間関係を広げた。メンタルや体調の不調については、1、2回生の頃はあまり感じなかったが、3回生になって落ち込むことが多くなった。1回生から（負担が）蓄積されていき、3回生後期ぐらいに体調を崩すことが多くなり、授業も全部参加することができなくなった。現在休学をしていて次4回生になるが、自分の感じていない部分でメンタル面がやられていたように感じる。

**学生 K（男性・GS・昼間主）：**私は元々中3から高3までスウェーデンにいた。2020年に日本に帰ってきて、外国語大学から愛媛大学に編入した。実家は東京にあり、前の大学がオンライン授業だったため、実家からずっと（授業を）受ける形だった。オンラインにあまり抵抗がなかったが、父が医療従事者であることから、家族で気を遣うことは多くあった。愛媛に来て対面授業が増え、対面授業も面白いと感じた。スウェーデンは興味深く、コロナにみんなでかかりましょう政策をしていた。（一方、）日本は抑圧的な政策で、どっちが良いかと言ったら50年後、100年後にならないとわからない。確かにスウェーデンでは、多くのおじいちゃん、おばあちゃんが亡くなったが、みんなでかかりましょう政策をしたが故に、ある程度、免疫がついた。政策で国柄の違いが出ることを感じた。

**学生 H（女性・人文・昼間主）：**入学前に抱いていた大学生活の理想と現実でギャップがあり、前半の2年はコロナ禍で結構しんどかった。勉強に対するモチベーションを保てなかった原因を自分なりに思い返してみたら、他の学部と比べた時に、実習や実験がない分、対面授業に対する重要性が軽んじられていると感じた。それを大学や先生側だけでなく、私たち学生もまあいいやと思っていた節があると思うので、うまく対応できなかった自分にも落ち度があると思っている。また体育会系の部活でマネージャーをしていた際にも苦労した。活動が制限される中で、マネージャーとして学生生活支援課の方と書類のやり取りで活動の許可を得る必要があったが、その対応には疑問を感じることも多く、しんどいと感じることが多かった。交友関係を築いていく中でも私自身が実家暮らしで、両親が医療と介護に従事していたので、コロナに

対する危機感が過剰になっていた部分があった。1人暮らしの子と話をしていたら、ちょっと無責任すぎない？と思う節もあり、交友関係を広げていく中で、価値観の違いに苦労したとを感じる。専攻が朝鮮語で、留学に行きたいという思いがあったが、長期の留学は難しかったので、去年のこの時期ぐらいに私費で留学に行った。大学の交換留学とかではなかったにも関わらず、国際連携推進機構に相談をしたら、親身に相談に乗ってもらうことができ、大学や留学エージェントを通さずとも満足できる留学ができたのでありがたかった。

**学生 A (女性・法政・昼間主)：**大学入学前から楽しみにしていた授業があったが、オンライン授業で教科書を読んで、感想を800～1,000文字で書きなさいという授業で、予想とは異なる内容にショックを覚えた。しかし、1回生後期(2020年度後期)ぐらいから先生のフィードバックが多くなり、授業アンケート等を見てくれていたのかなと感じた。でも中四国は感染状況が緩やかにも関わらず、愛媛大学の対応は中四国の他の大学と比べても厳しかった。大学の長い歴史の中の4年間かもしれないが、私の4年間の学生生活の2年間で奪われた感じだったので、厳しかった。人間関係ではあまり友人ができなかったのも、高校までの友人がインスタとかで遊んでいるのを見ると羨ましく感じることもあった。一方で、私が1～2回生の時、必修の授業が1限に組まれることが多かったが、オンライン授業になったことで、朝早く起きるの必要がなくなった。そのため、対面授業になってからは朝起きるのが辛かった。

**学生 D (男性・法政・夜間主)：**期待していた大学生生活を最初の2年間は送れず、いつどんな用事で大学に行ったか思い出せるぐらいしか大学に行っていない。1回生の8月ぐらいから体育系のサークルに行ったが、活動の停止と再開を何度も繰り返し、なかなか思うように活動できなかった。3回生になった時に、弟が大学に入学してきたが、僕の方が2年間先輩にも関わらず、弟の方が入学して1～2か月で自分が知らないことを体験していたり、友人のできやすさも違って羨ましいと思った。3、4回生は就活や進路のことで縛られることが多かったが充実していたので、何も縛られていない1、2回生の時はもっと楽しかったのだらうと想像する。

**学生 I (女性・人文・夜間主・社会人)：**社会人として大学に入ることは勇気が必要で、入学式のワクワク感もあったが、授業や課題に戸惑うことが多かった。対面授業だった英語の授業以外は楽しいことがなかった。友人を作ることも苦労した。生活面では、働いているもののコロナになって収入がゼロになってしまった。政府からの補償を受けてなんとか生活をすることができた。メンタル面では、3回生の終わりに

崩壊し、自己否定の時期もあった。そんな中、積極的な人との出会いもあり、励まされた。彼らの存在が心の支えになり、心から感謝している。

**【現在について】** 今年一年を通じて大学生生活はどうであったか。具体的に、卒業研究、就職活動はどうだったか、2024年2月現在、大学対応やみなさんの意識はコロナ禍前に戻ったか、あるいは、コロナ後の変化や傾向がみられるかを教えてほしい。

**学生 J (男性・人文・夜間主)：** 今年1年は、大学院進学を考え学業に集中した。その一方で、息抜きも兼ねて、3回生で出来た友人と遊びに行ったりもした。コロナの状況を気にしながら、活動していた。卒業研究も、コロナ禍前と同様のゼミ活動ができたと感じる。ただ、大学の対応や皆さんの意識に関して、正直なところ、コロナが過去の出来事のように感じることもある。しかし、これは絶対にダメでありコロナで得た知識や経験が疎かになってしまう可能性があると考え、コロナ後の時代に向けた行動や意識が重要だと感じている。不要不急の外出が解除され、マスクを外して生活できるようになったとはいえ、まだまだコロナは流行しており、新たな変異株が出現する可能性もあり、引き続き気配りが大切だと感じる。

**学生 E (男性・法政・夜間主)：** 今年1年の大学生活は、僕自身が編入した1年目で70単位ぐらい取ったので、4回生は学校にあまり行っていない。しかし、ちょっとした留学や起業塾などの活動に参加した。個人的には、今年の大学生活は特に異常はなく、いつも通りの感じで過ごせた。卒業研究に関しても特に問題はなく、今年になって評価が厳しくなったという話も聞かすが、自分の経験ではそれほど感じていない。就職活動は、採用枠が回復してきて、今年は採用してもらいやすかったと感じる。大学の対応については、コロナ前の状況に戻ったと個人的には感じている。(編入前の)大阪にいた頃は集団免疫をつけることを重視するスタンスだったこともあり、私自身はコロナに対して恐れることはない。夜の仕事をしていたため、何度か感染したこともあったが、それでも特に問題はなかった。

**学生 K (男性・GS・昼間主)：** 今年は附属高校で教育実習があったが、まだコロナを警戒して、マスク着用等、厳しかった。私は大学院に進学するが、卒業研究も問題なく出来た。

**学生 C (男性・法政・昼間主)：** 今年は就活とゼミで(スケジュールが)ぎっしり埋まっていた。前半は公務員試験があり、第1志望が難しいところだったため、本当に



しんどい時期だった。その上、消毒用アルコールで手が荒れ、コロナ禍で体調を崩しメンタルも荒れたり、かなりつらい状況だった。結局、第1志望には行けなかったが、第2志望に合格して一旦は安心した。しかし、ゼミが再開されてからはまた忙しくなり、研究も忙しかったため、コロナのことを考える余裕はなかった。コロナ自体は落ち着いてきて、制限も緩和され対面での活動が増えたので、そこは良かったと感じている。

**学生 F (女性・法政・夜間主)：**去年から休学をしていたので、就活や卒業研究はほとんど進められていない。周りの友人は4回生で、3月に卒業するので、卒論や就活を終えている人がほとんどだと思う。私は3回生から、大学に行っていない状態で、周りに同級生の人ほとんどいなくて、会うこともほぼない。そのため、卒論や就活にどう取り組めばいいのか全くわかっていない。意識としては、アルコール消毒が増えたと感じている。設置されている場所が増えたこともあり、手洗いに加えて家でもアルコール消毒をする機会が増えたと感じる。

**学生 G (男性・人文・昼間主)：**今年1年は、やはり就活と卒論が中心だった。僕は教員採用試験を受けたが試験が遅かったため、7月頭に1次試験があり、8月の終わりに2次試験が行われた。全力で取り組んだが、結局失敗してしまった。落ち込んだが、卒業研究に取り組むことで気持ちを切り替え、なんとか卒論の作成に取り組むことができた。その後、教職大学院に行くことになり、結果的には遠回りになったが良かったと感じている。周りの意識としてはマスクをしないで良くなり、警戒心が少し薄れつつあるように感じる。しかし、地元に戻ると、依然としてコロナへの警戒心があり、完全にコロナに対する警戒心がなくなったとは言い難い。

**学生 D (男性・法政・夜間主)：**今年は、授業と卒論と大学院試験の1年間だったと感じる。大学院試験の結果はまだ出ていないが、卒論は、仲間と相談しながら頑張った。秋に身内が亡くなり、メンタルが一気に落ち込んだ。しかし、1年間通して考えると、これまでの中で1番充実していた年だったと感じる。

**学生 B (男性・法政・昼間主)：**今年は就活とゼミの活動で、ほとんど終わったという感じである。公務員試験を受けていて、本試験の準備をし始めたのが3回生の10月、11月ぐらいからで、7月の中旬ぐらいに合格発表があり、第1志望の合格の報告をいただいた。8月ぐらいまでずっと就活で予定が埋まっていた。コロナ前がどんな感じだったのかかわからないが、コロナの影響を受けた印象はなかった。僕の所属している



ゼミが、いろいろな大学で集まって討論をするゼミで、1～2回生の頃だったら許可されていないであろうイベントである。しかし、全国の大学から200人ぐらいが集まって、イベントを行うことができたのはありがたく、充実した1年を過ごすことができた。この1年は、コロナによって制限されているという意識を持たず自由に過ごせたと感じている。

**学生 L (男性・GS・昼間主)：**今年1年の大学生活は充実していて、特に不満などはなかった。コロナの制限とかもなく楽しめたと思っている。部活動に関しても制限がなく、本来やりたかったリーグ戦に参加でき、満足のいく活動が最後にできてよかったと思っている。卒業研究に関しても特に困ることなく、自分のやりたいことを先生に助けてもらいながらできた。就職活動に関しても特に困ることなく終わったかなと思っている。また、コロナ禍だからこそ、オンラインの良さを利用して、同じ時間帯に2つのインターンに参加したり、説明会に参加してみたりした。加えて、オンラインの面接を録音し、後で振り返りを行ったりと、オンラインだからこそできるようなこともあり、自分としてはうまく利用できた。コロナに対する意識はコロナ禍前に戻ったというか、何も気にせず生活している感じがする。

**学生 H (女性・人文・昼間主)：**卒業研究は、短期の留学をしていたので自分が本当にやりたい卒論の題材を見つけることができた。就職活動に関しては、毎年体育館でやっている合同企業説明会は、留学の時期と重なって参加できず、就活が遅れるかもしれないという心配はあった。しかし、比較的最終面接まで遠隔の面接を設けている企業が多かったため、就活の早期化もさほど心配せずに就職活動はできた。環境のせいにしないことをコロナ禍を経験して獲得できたが、コロナ禍前の意識に戻るのは、完全にはできないと思っている。むしろコロナ禍前の意識に戻るのが必ずしもいいとは思っていないので、自分たちが生活する上で、コロナの経験を自分の肥やしとして捉えられるような前向きなものになれば良いと感じている。

**学生 I (女性・人文・夜間主・社会人)：**1年間は充実して過ごせたと思う。9月ぐらいまで病んでいたが、どうせ死にたくなるのだったらコロナにかかった方が良くと考え、東京に遊びに行った。そこで目の前が広がり、小さいことを考えていても仕方がないと考えが変わった。その後は名古屋に行ったりと、休みを利用していろいろな所に行っているうちに、広い視野を持って生活していくことが大事だと感じた。前向きに頑張ることができるようになり良かったと思っている。卒業研究については、先生が全面的にバックアップしてくれて、すごくありがたかったと思っている。コロナ禍

とかいう意識がなくなってきたけど、自分が経験したこのパンデミックを次に活かせることができたらと思った。また、みんなのところに同様に降り掛かってきた、コロナという不幸に対して、どのような対応するのかというので人間性が出ることがわかった。総じて、コロナを克服したわけではないが、このように会うことができてよかったと思う。

**学生 A（女性・法政・昼間主）：**今年1年は就活や卒論で忙しくしていた。就活で言えば、公務員試験を受けたが、春休み頃から落ちたらどうしようと不安になった。履修面談で（学生生活担当の）先生に相談したところ、忙しい方が気が紛れるからと言ってくださり励ましてもらった。民間企業を受けるつもりはなかったが、4月ぐらいから少しだけ受験した。多くの時間を割くこともできなかったのも、面接が全部オンラインでできたのはコロナ禍の恩恵だったと感じる。第一志望の合格をもらったのが8月末と遅く、うまくいかなかった時は相当辛かったが、最終的にはうまく行ってよかった。また卒論では、東日本大震災の津波で被災した大川小学校についての研究を行った。先生の提案もあり、9月に（現地に）赴き聞き取り調査を行い、自分として満足のいく結果が得られた。今が2020年だったら現地に行けていなかったことを考えると、1~2回生の時にコロナ禍で制限が多かった時期は嫌だったが、卒論や就活の時期に被らなかったのはラッキーだったと感じる。また、私はライブによく行くが、マスクをせずに過ごせるようになった。ライブ前だけは感染を避けるためにマスクをすることもがあるが、だいぶ以前の生活に戻ってきたと感じる。

**【未来について】**これまでの経験をふまえ、今後、大学はどのような対応をすべきだと思うか。また、コロナ禍で大学生活を送ったことに対して、将来への不安等はあるか。

**学生 J（男性・人文・夜間主）：**遠隔での授業スタイルが普及してきていると感じる。例えば、Zoom や Discord、Skype を使って、様々な遠隔地で受講することができるシステムが日本全体及び世界で普及したと思うので、引き続きハイブリッドな授業を展開していく仕組みづくりが大事だと感じる。またコロナ禍では、自分の行動が周囲や近くの人々に大きな影響を与えることに脅威を感じた。大学生の時期に人として取るべき行動や考え方についても、考える必要があった。今後、必要性を逐一考えながら行動することができると、コミュニケーションを取る場で活かされると思うので、様々な価値観を持った行動や選択を取ることで、人として成長できたらと感じる。

**学生 E (男性・法政・夜間主)：**今後同じような災害があった場合、大学の対応としては、いろいろな選択肢があると思う。メリットとデメリットを考えて、選択する必要があると思う。愛媛大学が取った行動は強い制限をかけることで、この制限により、サークルや授業などの学校生活に多くの制約が出た。この期間はお金を出しても買えない、1億10億出しても買えない貴重な時間だと思う。その中で、就活などで支障が出たと感じる。前の学校では、学校に行って授業を受けたり、受験や就職コースもたくさんあった。僕は大学編入コースなので、結果が重要で、学生生活を最重要視して毎日学校も通っていた。致死率が高いデルタ株の時は一部オンラインになったりしたが、個人的な主観としてはお金では買えない学生生活を優先すべきだと思っている。医学部のある大学がクラスターになったら世間的な当たりが来ることを考慮したり、クラスターが発生した時の対応は公務員の責任になると思うが、学生の1番幸せなことを考えて、制限を緩めた方がよかったと個人的には思っている。

**学生 G (男性・人文・昼間主)：**学生に寄り添うはずの支援課や大学が学生の視点と乖離したことを行っていて、そのような態度は改めるべきだと思っている。コロナ禍の生活を送ってみて感じたのは、オンライン授業が多かった分、単位が取りやすかった恩恵はあったが、授業料を払っているため、オンラインありきじゃなく、対面ありきの授業が良かった。大学が(学生に)提供できる最大限の教育サービスが受けられるようなやり方にするべきだったと思っている。新しい友人を作ることに關しても、制限があるとなかなかできにくいので、ただ制限を強めるのではなくて、学生が何をしたいのかを加味した上で判断をしていただきたいと思っている。対人関係として、コロナ禍で、相手のひんしゅくを買わないように下手に出ることで、少し顔色を伺ってしまいがちになった。今後の不安に關しては、友人とのコミュニケーションの取り方に少し苦勞する機会が多くなったと感じる。今後は相手の顔色を伺うのではなく、本音で話せるようなコミュニケーションの取り方をしていければと考えている。

**学生 B (男性・法政・昼間主)：**今後、大学が対面授業を行えなくなった時、感染症の初期段階では授業を全部オンラインでやらざるを得ないと思う。しかし状況がある程度収まった時は、授業を対面で行えるようにした方がよかったと思う。課外活動や学生祭などは後回しにされるのも理解できるが、大学に通う目的は学業であるため、学費を払っている以上、対面授業を可能な限り行うべきだと思う。コロナ禍での大学の対応については、情報が世間的に錯綜し、SNS でデマ情報が流れていたりしたので、自分が正しい行動や判断をするための考慮すべき点が多かった4年間だったと感じる。この経験を通じて、自らの行動や判断に責任を持つことができたと思う。

**学生 C (男性・法政・昼間主)：**対面授業を行えなくなった場合については、初期の段階では遠隔授業が主体になると考える。しかし、相談体制が十分整っていないと学生が困ってしまい、遠隔授業もまともに受けられないと本末転倒になってしまう。コロナを教訓にして、しっかり相談体制を整えてもらえたらと思っている。収まってきた段階では、各教員の判断も難しいと思うので、授業の規模や内容を考慮した上で、対面か遠隔かを決定するのが良いと思う。一括で全部を対面に戻すと、不安や問題が生じる可能性があると思う。コロナ禍で制限付きの生活を送ったことで、本来身に着くべきところが見につかなかった部分も多いと感じる。社会で耐えていくためには、さまざまな経験を積んでいくことが重要である。東京での就職は人が多く、競争が激しいところであるが、頑張って耐えていきたいと思う。

**学生 F (女性・法政・夜間主)：**大学の仕組みに対する私の感想だが、大学からの連絡が遅いと感じた。自然災害の際の休講等の連絡が遅かった。大雨の日に授業があると思って出かけたが実際は休講になったことがあった。この点に関しては、もっと早めに連絡が欲しいと感じた。コロナ禍でのオンライン授業については、2年間ぐらい大学に行かずに施設費などを支払わなければならなかったことに納得ができなかった。授業料はオンライン授業でも仕方ないと思うが、施設を使えないのにその費用を支払うのは納得がいかない。支援課もあまり対応が良くなく、支援課の人たちは大勢の学生を相手にしているかもしれないが、初めての経験で戸惑っている学生にもっと親切に接してほしい。将来については、コロナで働き方が変わりつつあり、出社が必ずしも必要ない場合があるので、柔軟性が求められていると思う。

**学生 A (女性・法政・昼間主)：**私も将来、感染症や自然災害が起きた場合、生死に関わる部分は仕方ないとしても、ある程度状況が落ち着いたら対面を再開してほしいと思う。ただ、「ある程度」の基準が難しいと思う。この判断基準がどのように決定されるのか、他の大学との比較も含めてもう少し明確にしてほしいと思う。

**学生 D (男性・法政・夜間主)：**1～2年間はほとんど大学に行けず、3～4回生の時に通ってみて、大学側もオンライン授業で最低限の学業を提供できるという考えだったと思うが、学生生活は授業だけではなく、課外活動やキャンパスでの交流も含めて学生生活である。そのため、授業以外の学びに目を向けるべきだと思う。キャンパス内での移動や教室での出会いなど、些細なことでも新しい友人や経験を得ることがあり、実際3～4回生で対面授業を経験して友人を作ることができた。そのような経験も大学生生活の一部であり、オンラインだけでは得られないものである。オンライン授業

には利点もあると思うが、全てをオンラインで完結するのはやめてほしいと感じた。

**学生 H (女性・人文・昼間主)：**コロナを経験した後、結果論ではあるがもっと緩急をつけた対応ができたなら良かったと思う。対応する際の厳しさや緩さをどう定めるかは重要で、大学の先生や学生がコミュニケーションを取り、意見を出し合う場があれば、より協力して対応できたのではないと思う。将来への不安については、コロナと自分の性格が相まって、コミュニケーション能力に不安を感じている。この意識から就職活動をする際にも営業職を避ける選択をしていた。将来、社会に出て経験を積む中で、自分と周囲との差を感じる機会があるかもしれないという不安がある。

**学生 L (男性・GS・昼間主)：**大学の対応に関して、コロナ対策に比重を置くよりも、感染後の対応にもっと注力すべきだと思う。コロナが出ることは避けられないと考えており、隔離すればいいと思っている。僕は、勉強はもちろんであるが、大学に野球をしに来たところもあったので、コロナ感染者がいなくても関わらず制限されることが勿体ないと感じた。この点について、対応の比重を考え直す必要があると思っている。

**学生 I (女性・人文・夜間主・社会人)：**授業がオンラインで行われる際に、一部の課題が、大学生のレベルに適していないと感じることがあった。私たち学生が疲れているから、という配慮があるのかもしれないが、大学生レベルではないような課題を解かされるのはどうかと思った。ただし、オンライン授業を適切に活用している先生もあり、配慮はありがたいと感じた。目の疲れを考慮して字数や課題を減らしたり、オンラインで聞きやすい形式を提供してくれる先生もいた。また、就活支援やその他の窓口、そして先生の態度においても、優しさが重要だと感じた。私は皆さんより将来がぼんやりしていて不安ばかりだが、できる限りのことを勉強し社会に役立てていきたいと思っている。

#### 4. おわりに

本研究では、学生の声聞く座談会を開催し、コロナ禍が始まった2020年度入学の学生（編入生は2022年度入学）に4年間で振り返ってもらうことで、コロナ禍における大学生の実態を明らかにし、4年間の学修状況や生活状況を把握した。

入学式もなく大学生活をスタートさせることとなった学年であり、4年間で振り返る場面では、過去を思い出して涙ぐむ学生もいた。多くの学生が、これまでになく心の

奥にある不安や葛藤を口にしていた。遠隔授業、大学内での活動制限は、キャンパスライフに希望、期待を寄せて入学した1回生にとって、非常に過酷な大学生活となったことが伺えた。また、対面授業に戻った現在の大学生活や学生の意識を聞いたところ、対面授業の良さや旅行ができる楽しさを語ってくれる一方で、意識としては、コロナ禍前の意識に完全に戻ることはできないと考えているようだった。コロナ禍を生き抜いてきた学生たちは、完全にコロナ禍前に戻れないし戻る必要もない新たな時代が始まったと捉えているように思われる。実際、4回生の今は、対面授業になり学内の施設も使えるようになったとはいえ、インターンシップ・就活のオンライン化を継続している会社もあるなど、コロナ禍がなかったことにはならないであろう。

今回のような予期しえなかった長期におけるコロナ禍という厄災を、うまく潜り抜けてきた学生たちは、新たなスキルや適応力を身につけられ、友人関係もオンライン上の新たなつながりを作る力があつたと思われる。その一方で、メンタルヘルスの問題も含め、友人関係においても従来の友人との関係維持が難しく新しい友人との繋がり方に苦労したり、コミュニケーションの変化に対応できず、不安を抱えている学生がいることも忘れてはいけない。今後は、コロナ禍で学生生活を過ごしてきた人たちが新社会人となっていく。今後は大学のみならず、社会に出た人たちの心理的な変化や他国との比較も注目し、引き続き調査を行っていきたい。

## 謝辞

この座談会開催にあたりご協力いただきました法文学部の教員、ならびに参加してくださいました法文学部学生の方々に感謝の意を表します。

また、この研究は、令和5年度法文学部戦略経費、及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。